

ネヘミヤ書 9章 民の誓いのことば

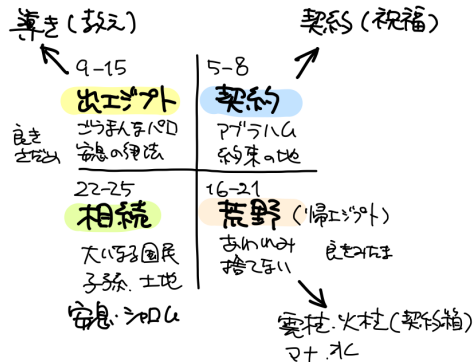
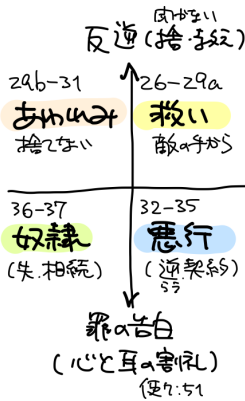


ネヘミヤ9章：民の誓いのことば

2019.6.20

— 預言者(士師-王) —

— 律法(創→ヨシヤ) —



- 契約. 正しい神, カナン=悪行
 - 苦-叫-声-救, エジプト-敵あつかう. 安息, 便7:53 律法(出エジプト) 便7:54 聖書(ヨシヤ)
 - ごうまん-捨てまい, 悪み-あいまい. 良心なき, 便7:55 便7:56 便7:57 便7:58 便7:59 便7:60 便7:61 便7:62 便7:63 便7:64 便7:65 便7:66 便7:67 便7:68 便7:69 便7:70 便7:71 便7:72 便7:73 便7:74 便7:75 便7:76 便7:77 便7:78 便7:79 便7:80 便7:81 便7:82 便7:83 便7:84 便7:85 便7:86 便7:87 便7:88 便7:89 便7:90 便7:91 便7:92 便7:93 便7:94 便7:95 便7:96 便7:97 便7:98 便7:99 便7:100
 - 安息の地. 良心 - 奴隷, 大いなる国民 - 大いなる苦難.
- ・ 42114 陥落 (2列王2:)
・ 111114 陥落 (2列王36:)
・ 14210 補囚 (ダニエル9:)
・ 111114 城壁 (ネヘミヤ9:)
・ 111114 証言 (便7:?)
(エヒラム陥落 AD70)

聖書の中に書いてある聖書の要約の箇所の一つ

ネヘミヤ記9章の5節から37節までの箇所です。A4で2枚ぐらいですね。少し長めになっています。最初にアブラハム、次にエジプトから出て律法を頂く、マナが与えられ、水が与えられるところ、そして荒野で言うことを聞かないというところ。それで、最後に相続を受けましたというところ。ここまでがヨシュア記ですね。創世記、出エジプト記、そしてシナイ山があって、民数記、申命記、ヨシュア記という流れになっています。

「それにもかかわらず」という箇所から最後の箇所までは、「それにもかかわらず神様があわれんで」「それにもかかわらず神様があわれんで」というのが4度繰り返されていますけど、ここの箇所は、士師記の時代も思い出しますし、その後のサムエル記、列王記の時代も思い出します。同じことをずっとやってるということになると思いますが、特定の時代を指してるというよりは、このモーセの時代、ヨシュアまでの時代の後の時代のイスラエルの民の反逆の内容を要約しているという形になってるようです。それで、その歴史に従って、今このネヘミヤの時に私達は聞き従わなかった。先祖たちは聞き従わなかった。それで私達は奴隷ですというところで終わるこの教えの形を分析しました。

モーセの教えのモーセの律法、創世記からヨシュア記までのところは、4つの段落に分かれていると見えています。それに対して預言者ということの士師記から王の時代まで

のことを振り返りつつ、この預言者の時代、ネヘミヤの時代にそのことが書かれていて、これも、4つの段落に分けられるでしょうということを見ました。

(前半5-25)最初、アブラハムの契約があつて約束の地に入りました(5-8)というのは、成就しましたという言い方で始まっています。エジプトから出る(9-15)、荒野に入る(16-21)、最後に相続を受ける(22-25)。

後半の反逆しているにもかかわらずというところ(26-37)は、(前半5-25と比べると)エジプトから救い出されて、荒野であわれまれたというストーリーの方を先に、この真ん中で、1(5-8)、2(9-15)、3(16-21)、4(22-25)という段落でいうと、2と3を先に言って、1と4が最後に来るという形で、この水色、黄色、オレンジ、緑という順番が(後半では)変わっています。

最初に、アブラハムに契約が与えられると言っていることに対して(5-8)、この告白のところは悪い行い、悪いわざを行って契約を捨てているというのがこの32から35。「主は契約を保ち」という言い方でこの段落が始まっていますから、この契約に対して、契約に逆らったということがここに書かれている共通です。契約、そして神様は正しかった、神様正しかったのに、と言うことも同じように記録されています。ここの段落(5-8)と、ここの段落(32-35)です。それでアブラハムのところにカナン人が出てくるのですが、結果的に王たち、つかさたち、祭司たち、先祖たちは、カナン人のようになってしまった。悪いわざを行って、神様のあわれみを捨てたという意味で、カナン人のようになってしまっているということだと思います。カナン人たちの偶像礼拝の宗教、その偶像礼拝の宗教をそのままやっているという状態、この悪いわざ、悪を行い、悪いわざをやめることをしなかった。「神様は正しい」「あなたは正しいのです」というところも並行しているところだと思います。それがここ(水色マーク)に契約、正しい神、カナン人と悪い行いとあります。

エジプトから連れ出されましたという箇所、2番目の段落(9-15)とこちらの最初の段落(26-29a)の共通しているのが、「苦しみの時に苦難の時に主を呼ぶと、天から聞いて救われる」ということですね。「苦しみの時に主を呼ぶと、天で聞いて敵から救われる」ことがこの2番目の段落の共通点です。ここ(黄色マーク)に書いてあります。

エジプト、敵の手から救った、「安息を得るや否や」ということと「安息日の律法を与えたのに」というところも並行しているところです。それが黄色の段落です。

荒野に入ったところは、「荒野に入ったらエジプトから連れ出されたのに、エジプトに帰りたい」と言っているというところ(16-21)ですけど、出だしがここです。後半は2番目の段落(29b-31)で、前半は3番目の段落(16-21)です。両方とも出だしがごう慢、うなじがこわい、うなじをこわくすると言い方から始まっているところです。うなじがこわい。こちら(16-21)は「あわれみ深いので神様は捨てなかった」と言っているんですけど、こちら(29b-31)は「神様を捨てた」ということですかね。「神様を捨てる、でも捨てなかった」というのが強調されています。あわれまれて捨てられなかった。ここに書いてあるのが聞き従わないということです。聞き従わない御霊に逆らうという話で「良き御霊を賜って」という言い方がここ(20)にあり、こちら(30)には「あなたの御霊を持って教えたにも関わらず」ということが書いてあつて、この主の名の宣言です。出エジプト記34章の宣言民数記14章にもここが引用されますけども「主はいつくしみ深く憐れみ深い」という神様の名前がここで書かれていますけど、こちら(31)にも「恵みありあわれみある神である」という言い方で引用されています。それがここに書いてあります(オレンジマーク)

最後(緑マーク)の相続(22-25)と奴隷(36-37)、これは反対ですね。大いなる国民、子孫が与えられ、土地が与えられ、産物がたくさん出て、安息の地に入ると契約の約束の相続を受けましたというところなんですけど、こちらの段落(後半26-37)では、最後にはそれは全部失って奴隷となる。受ける者は敵が持って行ってしまったという相続(22-25)と奴隷(36-37)ということが、ここの並行になっています。(22-25では)「大いなる恵み」という言い方で相続のことがまとめられて、こちら(36-37)の苦しみの方、奴隷の方は「大いなる苦難のうちにある」という言い方で終わっています。

このような言い方がありますが、その前に、前半の出エジプト(9-15)と荒野の話(16-21)、後半の救い(26-29a)とあわれみの話(29b-31)、これの共通点というところが、「エジプトから連れ出して荒野で導いた」というこの導きですね。教え、導き、教えの歴史と、それを捨てる、その教えを聞かないので、これが反逆、この教えに対し導きに対してその教えを忘れる。そのみわざを忘れるという反逆。これは絶対に神様は忘れないということが、昼は雲の柱、夜は火の柱、マナを与え、水を与えるというのが、この中で2回繰り返されて出てくるところですね。神様は共にいるということのあかし12節と19節。その事を忘れていているということが、こちら(後半)になっています。

この歴史の書き方自体が、ネヘミヤはバビロンに連れられて行ったイスラエルの民が戻ってきて、エルサレムの城壁を築きました。仮庵の祭りをして喜びました。律法を読みました。その後の誓いの言葉なのですね。この時に「アッシリアの王たちの時から今日まで」という言い方をしていますけど、似ている言い方で「神様の言葉を与えられたのにもかかわらず聞かずに預言者たちを殺した」というような書き方があるのが、列王記第2の17章にあります。これは北イスラエルの都であるサマリアが陥落するという時に、この箇所が書かれています。

その後南のユダですね。ユダが陥落の中心であるエルサレムが陥落するという時にも同じような言い方が出てきます。これが第2歴代誌36章です。それで連れて行かれました。バビロンに連れて行かれた時の中で祈る祈りのダニエル9章の祈りですね。この中にも「あなたのしもべである預言者たちが名をもって王たち、君主たち、先祖たち、民に告げた言葉に聞き従いませんでした」という従わなかったのでその律法の呪いが来たのですと。それで「大いなる憐れみのゆえに救ってください」というダニエルの祈りはこれらの陥落、陥落そして囚われているところ、それで連れ出されてエルサレムの城壁が築かれたこのネヘミヤ9章、そこで同じような事を言って誓いの言葉を行っているわけです。

これらの言葉が使徒行伝のステパノの証言にあります。ステパノの証言は、ずっとアブラハムからエジプトでどうだったのか、モーセが連れ出してという話をして導きましたというこのエレミヤの9章25節ぐらいまでのところに、ずっと細かく言われて、その後短いですけど、ダビデが来て、ソロモンが神殿を建てましたと言った後に「ああ強情で心にも耳にも割礼のない人たちよ、あなたがたは預言者を殺した。律法を受けたのに守ることをしなかった」という言い方が続くんですね。それはステパノが「聖所と律法に逆らっている」と「聖所を壊してモーセの慣例を変える」ということを言っている偽りに対して答えているという形なんです。

このうなじのこわい、心にも耳にも割礼の無い者が聖霊に逆らっている。律法を受けたのに聞いてないということを言いますが、このネヘミヤの中で「御霊のことは、御霊に導かれている」ということが3回ありました。それと「聞き従わない」ということです。この聖霊に逆らう律法を守らないということは、ステパノがこういうネヘミヤの箇所などを念頭に言っているんだろうと思われまます。

ステパノの証言自体は、エルサレムの第2神殿が裁かれますという時代に語っていますので、同じように裁かれた新しい時代が来るということの証言の言葉だということが言えると思います。古い時代、今までの時代の神様の導き、教えを記念して「しかし私たちはやっていない」という罪の告白をする。これが、誓いの言葉だということだと思いますけど、ステパノが言っているように「心と耳に割礼のない人たちよ」と言ってるんですけど「心と耳の割礼をしている」というのが、この最後の「私たちは悪を行い、奴隷です」という告白(32-37)。これは「心と耳に割礼をしている」というようなことになるんだろうと思います。ですから、これが誓いの言葉、契約の言葉ということになってるのだと思います。

全体として、主の導きの歴史。その導きの歴史、導きがあるにも関わらず教えを聞かない。御霊の導きに従わないということが、この誓いの言葉の全体の概略になっていると思われま